



主張

正解とは…

厚 東 和 彦

新型コロナウイルスの影響で、長期にわたって臨時休業が続きました。私が勤めている学校では、五月二十五日、約三か月ぶりに学校が再開しました。新しい生活様式のもと、マスクの着用や手洗いの励行、毎日の検温等、感染防止対策に努める日々ですが、学校には、やはり生徒の輝く笑顔や元気な声がよく似合うと、改めて感じています。

しかし、残念ながら、学校に登校できず、輝く笑顔や元気な声を見たり聞いたりすることなく、卒業の時を迎える生徒がいることも事実です。平成三十年度の調査によると、全国の国公私立中学校に在籍する生徒の約三・六%が「不登校」という結果が報じられています。該当する生徒やその保護者等への対応に心を砕かれている先生方の御苦勞には、本当に頭が下がります。

振り返ってみると、中学一年生の担任だったとき、入学前から学校と疎遠だった生徒がクラスにいました。学校にきてほしいという一念から、毎日家庭訪問をして、本人か母親あるいは二人と話をしようと決め、ずっと続けていました。しばらくして、母親から、私に毎日足を運んでいただくことが申し訳ないという言葉が聞きました。自分自身は、何とかこの生徒のために頑張ろうと思っていたので、「私のことは気にされなくて結構です



よ。」と答え、その後も家庭訪問を続けました。

ここまで書くと、次の展開は……。みなさんお察しのとおり、「毎日」を「二日に一回」とお願いされ、さらには、「週に一回か二回」となりました。学年主任や生徒指導主任といった先輩の先生方からも、相手の気持ちも考えて頑張れよと言われたことがありましたが、そのアドバイスを耳を傾け、じっくり相談することもなく、「自分が…」という思いで、家庭訪問を続けていたように思います。しかし、その後「先生、家庭訪問はもう…」というような言葉が母親の口から出てきたときには、さすがに、自分がしてきたことは自己満足のためにしていたことだったのかもしれないと思うようになりました。また、先輩の先生方からのアドバイスを耳を傾け、相談しながら進めるべきだったと反省しました。

私は、その年度をもって異動となったため、その後を見守ることはできませんでしたが、ちゃんと登校して、頑張っていたと教えていただきました。その話を聞いて、自己満足に走った自分を反省するとともに、自分の力のなさを痛感しました。学校や担任がどう対応されたのだろうと思いを巡らせましたが、それ以上尋ねることはできませんでした。

こうした経験を通して、生徒や保護者への対応の仕方は様々あるけれども、その時々々の生徒や保護者の心情に寄り添い、一緒になって、次に進む方向を考えていくことが大切なのだと思います。そういう対応には、教員だけでなく、協働する教員集団や学校の懐の深さが求められるのだと思っています。「正解」がないだけに、どんな状況でも、どっしり構えて対応できる学校を目指して、教員を支えながら、学校全体で頑張っているところと、原稿を書きながら、改めて思っているところです。

(全日中副会長・山口県下松市立末武中学校長)